那覇の寄せ場

仙道　久忠

１．はじめに

本論文では、2006 年 9 月 18 日から 23 日までの期間行った、那覇の寄せ場の実態調査によって得られた成果を載せるものである。

那覇の寄せ場の実態を記述する前の作業として、まず寄せ場についての説明が必要であろう。青木秀男によると、「寄せ場とは、日雇労働者が手配師の仕事斡旋を介して就労する場所」（青木 1999：26）のことをいう。早朝の寄せ場は、日雇労働者と手配師が労働力を売買する場であり、「ヤミの労働力市場が公然と展開されている場所である」（山口 1999：44）。

寄せ場の代表例は、「東京の山谷・横浜の寿町・名古屋の笹島・大阪の釜ヶ崎」であり、「通称４大寄せ場と呼ばれる」（青木 2000：29）。このうち、「山谷、寿町、釜ヶ崎は、日雇労働者のためのドヤ（簡易宿泊所）が集中するドヤ街でもある」（青木 1999：26）。ドヤ街は一泊 1,000～2,000 円ほどで宿泊でき、日雇労働者や、現在では生活保護受給者となった元日雇労働者の単身男性の生活の場となっている。

また、ドヤ街のない寄せ場もあり、「ドヤ街のない寄せ場は、日本全国の都市に散在している。通常、交通の要所である駅や港や幹線道路近くに存在する」（山口 1999：44）と指摘されている。

しかしながら、寄せ場が「日本全国の都市に散在している」と指摘されているものの、那覇の寄せ場について研究報告された事例はいまだ見当たらない。そのため、本論文における記述は、すべて筆者の聞き取り調査をもとに構成されている。聞き取り調査は、早朝に寄せ場に集まっていた日雇労働者や、かれらを支援しているボランティアグループの一員である OY 氏を対象に行った。

２．那覇の寄せ場

那覇には首里城の守礼門入り口の交差点を中心として、早朝に日雇労働者の集まる寄せ場が存在する（図１）。寄せ場のことは「立つところ」「立ちんぼ」といわれ、沖縄方言で指す言葉はないという。

首里城の守礼門のところが寄せ場になったのは、20～30 年ほど前に、当時あった琉球大学の学生が守礼門の前に立ち、肉体労働のアルバイトを求めたことがはじまりとされている。現在では守礼門の前は車止めされ、工事を行っているために、現在の場所へと移ったという。

寄せ場では、軽ワゴン車がやってきて労働者をピックアップしていく。８時から仕事がはじまるので、それに間に合うようにピックアップされていく。離島の橋の工事

などの場合は、手配師が一度来て、いったん日雇労働者の電話番号などを聞いておき、その後２～３日してから集合させて現場に向かうという。

仕事は顔づけでなければなく、日当も 7,000 円ほどである。仕事は９月から翌年の３月まであるというが、それでも１ヶ月に１週間仕事があるかないかで、あとはアブレるという。４月から９月は公共工事の端境期であるため、仕事はほとんどないという。特に年度始めの４月は極端に少ないため、労働者の３分の２はアブレるという。

寄せ場は他にも、おもろまちの職業安定所の周りや与儀公園、浦添市にあるという。職業安定所の中でも仕事を紹介するが、掲示されている仕事は時給なので安く、中には最低賃金の仕事もあるという。また、沖縄には人夫出し飯場はないが、「人夫出し」という言葉はあり、手配師のことを人夫出しと呼ぶ。

図1　那覇の寄せ場

地図上で、「首里真和志町」という表記の下の斜線が引かれた部分が寄せ場となっている。

調査時（9月 22 日）には目視で 10 数人の日雇労働者たちが集まっていたのが確認された。

（「Google マップ」2007 年１月 24 日現在）

３．那覇の日雇労働者

寄せ場に集まる日雇労働者の数は、沖縄サミットがあった 2000 年ごろには 50 人ほどいたというが、現在は 30～40 人ほどであるという。日雇労働者は単身の男性で、50 代～60 代だが、中には 30 代～40 代の日雇労働者もいるそうだ。

調査時（2006 年 9 月 22 日）には、目視でおよそ 10 数人の日雇労働者が集まってい

たのが確認された。日雇労働者たちは、首里城周辺の公園に野宿をしているというが、与儀公園、若狭の旭ヶ丘公園、奥武山公園の野宿者も首里城前の寄せ場に来るという。

野宿をしている日雇労働者には派閥があり、沖縄本島・宮古島・石垣島の方言の違いによって分けられている。各派閥にはボスがいて、食事などの面倒を見てくれるという。日雇労働者同士がたまに酒を飲んで喧嘩することがあるそうだが、昔に比べて喧嘩や口論などはほとんどないという。2000 年から 2003 年ごろまでは日雇労働者の間で傷害事件が多くあり、血まみれになる日雇労働者もいたそうだ。

ドヤは首里城周辺にはないが、国際通りの裏に 1,000～1,500 円ほどで泊まれる場所があるという。調査時には首里城前ストアのところに、体格の大きいＡさんと、痩せているＢさんが座っていたが、Ａさんは実家から通い、Ｂさんはアパートから通う労働者であった。

寄せ場には、他にも次のような３人の日雇労働者が集まっていた。まず、守礼門入り口前の交差点に立っていたＣさんであるが、長袖のポロシャツ、作業ズボン、長靴、帽子を身につけており、手にはスーパーの袋に入ったヘルメットを持っていた。Ｃさんは、自分自身で会社を経営しているが、暇になると首里城前に立ち、仕事を求めるという。Ｃさんは「首里の生まれ」だという。

次にＤさんであるが、紺色の作業着、長靴を身につけており、筆者が話しかけてもほとんど話をすることはなかった。しかし、時折不安そうな顔をしながら、不景気で仕事がないため困っているということを口にした。

そしてＥさんであるが、サングラス、白い半そでシャツ、スラックス、運動靴を身につけていた。手には発泡酒の「麒麟端麗」の 500ml 缶を持って飲んでいた。Ｅさんは 70 歳（2006 年 9 月現在）だそうで、45 歳から 50 歳までの間、沖縄と福島を行き来する出稼ぎ生活をしたという。

また、Ｅさんは寄せ場に集まる日雇労働者のことを「日暮し連合体」と呼んでいた。この言葉はＥさんだけが使用していた言葉であり、他の日雇労働者がそのように呼んでいるのかは明らかではないが、寄せ場に集まる日雇労働者であるＥさんがそのように呼んでいたという事実は興味深い。

参考文献

青木秀男（1999）「寄せ場―差別と意味の社会学―」青木秀男編著『場所をあけろ！―寄せ場／ホームレスの社会学―』松籟社

――――（2000）『現代日本の都市下層』明石書店

山口恵子（1999）「寄せ場・ドヤ街・駅手配」青木秀男編著『場所をあけろ！―寄せ場／ホームレスの社会学―』松籟社

地図

「Google マップ」http://www.google.co.jp/maps?ie=UTF8&oe=UTF-8&hl=ja&q=&z=18&ll=26.219019,127.71592&spn=0.001858,0.003573&om=1&z=18&pw=2